絵入
竹むすめ
上

中野文庫

かぐや姫物語

いまはむかし竹とりの翁といふものあり
けり野山にまじりてたけとりつゝよろづ
のことに用ひけり竹の中にほのかに
光ありけるをみるに一すんばかりなる
人いとうつくしうてゐたり翁いふやう
我朝ごとに竹の中におはするものと
しるに竹の節を隔てあまたありけり
翁竹とりにこめてやしなふほどに
竹とりのおほきなること三年ばかり
なりぬ翁竹をとるに竹の節をへだ
てゝよなよなこがねあまたみつけ
ぬ竹とりの翁やうやうかねもちに
なりぬ翁竹とりにこめてやしなふ
ほどにこの子すくすくしうなりまさ
るに三月ばかりなるほどにこしに
たちまちにして成人の女にしなし
てけれ髪上げさせ裳着せつ

けて屋一なる人うくてき事うきりの
いとおそれる事はこゝに入こ屋一るゝ竹とり
乃おさな竹と居ほしるとゝ月けてのらるゝけ
ゝるよりて一とゝなくてくゝこゝにおりひある竹をミ
ほくるか事一かさるりぬかくてあるれやうく
ゆくりにるりゆくはちこやーるゝほとゝまをく
くとおほぬまるりまきは三月こりはなる
程よりれほとるるくゝ人ゝるりぬまはかこゝあける
とはくしてかこゝあけるさきらやうゝ乃内よりも
出さすいろきかーはきゝ屋一るゝ行ゝはちこゝ乃
かゝらのけそこるゝ屋事世ゝかゝ屋の内を

くゝきとこゝろるくひゝりるゝちゝりあるれちく
ちあゝくゝゝ屋一きゝ屋ゝをはみとゝれこくるゝ
きるゝもやこぬゝくゝたくゝきゝ事もかくなく
さゝんこりあるれそはけとゝ屋ゝひゝくゝるゝ
はゝくゝゝりはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝはゝ
みむゝとゝいんゝ屋のあゝこゝとゝるひてはけこゝあ
きゝなゝこ竹一のかくゝやひあゝと竹ゝゝはゝ三百う
らあけ竹そゝゝゝゝ乃あゝひをゝーけるお
とこゝゝうけきゝいゝはゝもひはゝくゝりゝこ
くあそゝ世界のくゝはれこあてなるゝりやゝーゝ
もゝりてこのくゝやひゝんゝをゝてゝーゝるゝんてゝ

のれとをとにきくめてくまくふうのあるりの
かをさるをもあれをさるをもをる人さまをやをこく
かんるまをしきりの紙よるは海を紙いものひをやミ
の家よをこてかーこりのそ紙クひまんまをと
ひまをなりさ海ときさりあんよまをひとといひろう
人の物ときをせぬ下のまをひありけをとをる水乃
をるーあるへくをんくをおの人ちよ物ををに
いをんとていひかるをれをとをあをくもせたある
まをとをるれぬ者を逆とあるー目をくくと人お
かりけるをわるかなるひをは一まるをさありき
ををーなりけるまをとてあをるりよをりを年

よをるいひけるをいろこのをといを御人ゑ
人男ひやむををれくをりゑりきりりそのの
名一人をりーけくるまれ海ゑ一人をくくもちの
海子一人をを夫長あへ乃をもむくー大納云一人
をを夫俳のをゆをを年納云一人はいそのりんのりろ
をりは人をるりりを世中ゑお酒り新人ををゑ
ををくもかをちりーとをくてりりんまりくをを
俳人をちりりれをかゑや初発をりんまりくを
て物もくをを男ひをくかのを物ゑりりてくすを
ありををれをかひをへををゑくををゑをりて
海れをもをるゑもせををひうををりをてつ

ういひまたかひなくと思へとも春月秋月の
ありあふるまこと月乃てわもてくるをさい〳〵
をきゝりぶ人こあるとゝ記を行とりとゝひ世〳〵
てむとゝゑんと我よりゝ人こ物〳〵おうゑんをとをりの
ゝ、こをのゝをゝをゝぬるをれハ必にをゝをゝうえ
ひとをゝんいひく月月をゝをゝ落かれゝけ人こ
あようゝりく物を思ひいのりをゝ〳〵くゝんを三
おりひやむへくゝとあ〳〵ひゝたゝをゝる男あハ
せゝゝむやゝと思ひくゝをゝのこをゝうけゝりある
ゝゝよんゝゝ〳〵をゝんくあゝくゝあれをゝんつけてお
きれゝくやひあよいゝやゝゝ先をゝほゝけゝんけの

人とゝあゝ〳〵ゝ物ゝ程おゝほゝゝたゝもてやゝゝゝへ
をゝる必ゝ〳〵をゝゝゝるゝひおゝれのゝゝさん事
きゝあひてんやとい〳〵ゝかゝやひあ何事をゝ
のゝをゝりんゝとゝゝれゝゝゝゝむゝんけの物をて
物ゝんゝ方ゝをゝゝゝすおゝとゝゝそおゝひをれと
りゝおゝをれゝうをゝゝゝくゝをものゝゝものゝれゝとゝりゝお
ゝゝか年七十よあゝゝりぬゝゝゝゝもあゝすゝもゝ
らゝゝば世ゝ人ゝゝ男ハ女よあゝゝ事ゝとゝ女ハ男
ゝりあゝゝゝゝ

といへとも百人ばかりの人と
ともに女の身もち
給ふりあさなれあるんかきりをかしてもい
ませりこの人々の年月を重ねかしのこゝ
面一つのさまをそのと思ひ定めてひらく
よあひあへといへとかるやひめいそく能も
あらぬかゝちとあるきいとをしてあさんはき
るはのちくやしきまもあるきとと捨りし
そうりるる世れかこゝろ人なりとも
ぬしたゝてあひくゝとなんはりとといふ
おるれいとく思ひのしくもの絶るうも
くいのやうるさくゝあるんへりり

ありんとおほをかゝりんをろうるぬ人
人よそあれくやひめのいとくかたらの
ふうきをうるんといたんいたのなり
人乃世ひしひんなりいてうをを
とりあさりをゝひるふ人乃中よ捨きも
のをるせあへ所んよ世さ海さりとて
ぬうまんくんとその母をるん人こよ
絶へといふうを事うりとうをろ日くるか
と出いのあつまりぬ人こあるひをえとあさ
或をこのとうゝひ或ハをやうをあるひいう
そをあさあつきとあしをすにおこるあて

いとくるしきことなれば、ところよ年
月をへたるもの一行ありて、かくこま
ゐとり、おのれの命をいとをしみぬとか
くのみ、老年にもよく思ひたるあてはかう
ぶれとやもことわりなるといつまをとりまき
里おとしまさまをしたひ、ひさしの程をあんゆ海し
ぶりまつりまつん事、色をれよるんはりごとへき
といふ色をこれ紙事也人のうらこもあるまし
といふ人乃人とも能事ありといへおそれ
いりていかくやひめ石作くりの皮ゆ佛
の皮石乃はちといふ物ありそれをえてあへと

いとくるしきことなれば、ところよ年
云ゆあるなりそれよりをねとこうる
をくるしく白きをみてさくれまあり
を色一えさおりてはまりんといふ今ひとり
はもろもろまるのうへこのうへをあへ
大伴の大納言まいしのくひよ又をひ居
ゆありそれをえてしうへいそのうへ中納言
はしたくしめ乃もるこやをは奥えて所へ
といふあそれかくれ事よりてあるまひゆ
ものはもあるすかくうるをいうより
さんといふかくやひめうかりかうんといへ

とおもふなとあきうくもあまとりさんとうく
おてかくあんやゆるやうよりのへといへとも
ゑ〜ちよりまをおきくてをら〜うよあうりより
ふかるありきそとやひんのくまりあねと云てうん
してこれくりぬるを正女人そは世よあるまし
きのちの〜くれてくんちくよるあもてを
ぬ和うくと思ひめくう〜くい〜つくりの中を
こうろのをくくを人なて天ちくよ二川と云沢
をちを百ゑ万里のわをといきりとをいりてこの
ゑんきとなりひてかくなひめのもとよハくゑ
あんをちくへ石のをちをよ海う海ときうを

て三年ひうり大和乃国ゑ波ちのこをりよある
山るよひんをろのまへゑ海をちのひをくろよ
をんつをゑ海をとりてあ〜きれあ〜海よへて
ひくつを花のをくよ海けてかくやひめのをり
をてをくかんをけまをかくやひめあや〜うて
これをいちの中よ又あうひろまをてんまをし
うを山のみちよ心を海くををいしのをちを
の海るうまけかくやひ光をりやをとんろに
和ゑ海をうりのひうりをふかし
をくはをのひるまををにもやとをまし
海くをの山ををてをよりめうん

とそ思ひ出でとこちらを門より拾てひ分のやーとん
ち〳〵山よりあへとひくりのうを分ること
こちらとそてこしもそのまろうか
とうんとくへさりかくやひ給んせしるりぬ
乃て無をきへさりけきていひのひらひて
塗りぬなくらとすてこ又いひけるまわそおも
ちきるすといたちらとをたるとを云けるくらも
ちのはるをひさとかりるを人まてあけまん
はくーの國よゆあこうりまうんていら海
やてうくやむめの部よいまのえさとりよあん
きう海といとせくくりゆつよたうまろ

海き人くんが鄰海まそ出をとり出けるはをの
とものひてとの給ん世て人もあまるあそおん
ーまたちうーはうまるうはりーてあのひ
はをうまるうを人うれをまわをうまそ海りぬ為ら
まりぬと、ハはんくはひくを三日まりるるてこ
き給ぬうひてこーんが給りられそを海一川
のたうーるりうを海うもるるを六人をめーえて
ふ海をくへまりーき家をたくりてうま
と紙を海をを為てたうを入給ひつはたよし
国形よこまりあひてきーせ給ひう海海十六そ
をうんよくと紙あひてあのえう紙はくり給

かゝやひめのもの思ひ給へるさまいと
と物ゝあはれなるけしうちうち
出ぬ事のみて物りさびしうかんそうまして
ていとゝいとをくるしかりし御様にて居給へり
むかしよりおやく兄弟とはもひ給へ
へて物のほひく給てしあるいつゝ少うちんくも
ちの御さまうとんくろ乃花給てのかり給つり
とのゝ御ものりあれをやく毎ひめきくて我ハ
ひ給ふてりまけあへしーとひ給れてなりひ
そりかゝ新程よりをたくきてくもちの御ふ
おりーうりと御く旅の御姿おりーうりと

いへくあひ給ふの給りく命を捨て給ふ
のえくを捨てきく所とそかくやひめよりんをなり
給へと以ゝ御ふれ給ているくりひなるの程
よりあんそ給けるりけ給
いくを給くよりあいおりつくをあのえを
ものくーて給くよりうけくます
先をを養ひもんてをあるよ行先のおきれりる
へてのくく給ふよりー給ひーからいのお
乃えくを一給れ西をあやまくひとておりーま
せり御を捨てくりくさ旅の御姿おりくこと
り御者へをより給ひをーておりーまーきり

とやはしるまはあひたうまつり給へといふり
物もいとたつ〳〵しうたえんを持きていとうしくるけう
しけう思ひとりはしるを今さへ侍るといへうう
をとこもまこにえんまはひのかり給なおきれ理
ま思ふはしる國まはんしぬおのの殺うりはしるは
ういるひゝさん人物もう紀人はおとこるといい
ひねうりかくなひえの云物おのの乃めをを
ゆうこ海ういるひゝさんこのいとおきはれ
うこ紀物我らるこあさ海ゝをとて為るをを
そうく思ひおきるは神奈のうちまつ〳〵ひるとて
おきれはるまはゝ物はうるれまいひひ

くんあ國ゝくうはつ〳〵めてゝ紀物ゝをを
ゝはるこゝんてのゝ海ゝくさおゝゝゝ紀二月
の十日ゝゝは雅波はゝり毎にのりて海中はお
て為ゝんおもをゝゝを見をゝゝゝと思ゝるゝ
ゝく世中はいさ何のゝてせんと思ひゝゝたく
ひるゝきゝ風は海ゝをゝくあゝゝを命ををいかゝ
を乗せんまてあゝん限かくありきてやゝらゝを
云らんゝはあやと海はをを紀をゝはひあゝき
て我國の国をゝるれくあゝきゝおゝゝはゝ河へ
波あをつゝうまこのゝこゝをを入めへくゝを河は
風はゝはけゝくをゝゝ國はゝゝゝをゝれて鬼乃やゝ

なるあねおなてこわさんとしきゐ河よハこてかさ
りすゐもちしてうゐよゐ紀きんこうゐゐ河ゐは
うそ作さくまれ福をくひめとゐ河いうん
かゐれくむく作けきゐ明るゐのくれてくひかく
らんと　きゐ河ハうんのいをえて命をつく
藤のそこにすけ治ゐ色さ人もゐき耳ゐよゐて
の病をしてりまゐきもえこに毋れりまゐせ
てうゐよたくよひてゐ百日と云ふ川のくれ
ようゐのゆようにに山んゐ毋れ内をすんせ
めてんろうゐうんよりうゐよそゐ山いゐおりさ
まてありゐゐ山のさ海ゐるくうゐ新りて見やりる

もとむろ山ゐるくひと思ひて出すにおそろ
ゐを見えて山のめくりをはしめくるくして二ゐ
日計んありくゐ天人のようなひゐる宿女山の
中ゐわおゐて毛ろゐ山乃ゐれまゐを持てゐゐく
ゐありく見をんて毋ゐおりくこの山乃名を
何とゐトとゐよ女ゐ人ゐ云ゐこれいかゐらい乃
山ゐりとゐよ見を出るようまてゐゐ少紀ゐす
ほ女ゐくのゐまゐ雅ゐとゐゐ小我名ゐゐゐかて
るゐゐゐてゐと山乃中ゐひぬゐの山をんるゐ
ほくゐよ山宿ゐき移ゐ一を山のそいひゐをめく
きゐ世中ゐゐき毋の未ゐゐゐ金ゐろゐ

[illegible]氷山より流出されたるこのむ
乃橋源世りをあらりよてりかく爲く蒙立り
をあはよはうみて拾くまてきてわーをひとろ
るをしつたの紛ひーよらいまーくとこの
花を拾てまりて来る廻山をかさりなく雨白
世よりとつ爲をたあくはちわーっとはえることれ
てーくて文よりとなくて船よのりておひ風
吹て空青金月よあんまうてきあー大勢ありや
難波よりきのふ南都よ流うてきち爲文よ塔よ
ぬれしら夜さよぬきう爲なてあん立まうてき
はるとのあへも拾され吹て拾りあけきてよめる

[illegible]れ行の世てろ[illegible]ろけとり婚山よを
さやをわ彩ーき姉ーをのこ乃ー
色を流よ吹てあく殺の日ころ思ひま乃行つる
のはけふんあちぬめるとのくまひてぬー
わてりとくふ乃は行きいりひーきの
ふなろ乃ろをもまくまあへー
との給ひかく海賊よ男た六人作こひて遊り
おま一人の男ふてきみ乃文をときみくーくも
むはくさ乃きくこあやを爲のうちまろーきくむ
の本を作くり作ふまろりー事ーお國をとら
て千余月よ力を作くーくろりまくおろーす船

よろくいまさ行りうれ是を行てまろきけこよ
給せんとこそさくさけしかりと奇行れのあされぶさく
こらうりてるやハ何事そとかさきあり清こみハ
わきまるもあるぬ事きすてきもきえる給ワ
見とかくなひめきくてはなる文とそれと云て
これハ文よりけるやう清の君千日いやしき
さくこしらとそろこもに同ものかくまこの給ひく
かりこ清みのえこを清くなる世給ひて清ら清を
たまりくもと給のひさ見をはは給あんまるに
清つうひとおたくまるへきかくなひめのえう
しー給へきすりうりとこ聞てはなるより給いく

むとうて給へきなりとりうれきくてかくやひめ
くなくまくるは思ひこ給るの地まるひたうへ
ておされをまひとりてこ云ふう誘りらいの本
かとこうおりひたきかるあさ海ーきこうあと
まてるけきこはやせしー給へといへをあされこと
ふたうこたくせる海地と空作まはうへさんこ
とのとやをこーとうあ門きをりかくや見光の
んゆきこてくあり清るこれせー
海ことかやをやてんつきこと礼こと
うさきき給みよえこをそありける
見のひくみれえこをやつ竹れのあされたん

うりかくしひたすらにおかんてねうり
をまはるをいとまもなくうつくしうして居
給へまはれ自ら蓄めまはしをへまは出給ひぬ程うまへ
せ一たくんをはかくやゝ初めよりひとへてうまー
き人ともありといひてろくいとおりくらせ
給へたくこらいうくくよんこひて思ひ作り拾
ものをあるくれと云て物乃ますてくうもちの所
まちのあり所〳〵を調させあふ乃をえくひも
多へ皆とり拾させひてけまハるけうせよあ
里ぬをてび物子一ちうのたち色よりをるハあ
一女城始をありぬのこまあ〳〵す天下乃人の

おもりんをれをうくーきうゆとのあひてうて一に
ものをさ山人りり給めぬ交作をさ作りゝ姫人く
給をまをうちくもめなれた泥死よりやし
給ひうん給ひ作けなー代姫ぬ作ゝ乃作作よう
ゝ給をんとて年作をて給ハさりけ家也色を
あんまを作ゝ所をは云ゝめけ家を天作あ人乃
ミむゝ〳〵をゆゝうよ家ゑりさ人まて
おりー世作こを年ーきりけ家もりうー般のを
うけいと云人のりくよゝを書て央給をこのう
をとりゝ人をる拾りひてをこせよとて作りゝまりう
人の中まをたーりゑりをえゝひて小殺のをさ

もりと云人をたけて作りたてゝ世ゝにはうよ
ゝ富まうけいよ〳〵金をとゝうすわうけいあこと
ひろけて万ゝくゝ世事かゝる大福すこのうへこゝろも
此國ゝまさ物也をとゝはきけたいこうこゝぬ物
あり世ゝまこ物をゝ此ゝ世ゝ物よもゝてまうくきか
ものゝゝとかゝ記あさなひ也然共ゝ天ちくゝ
世ゝうゝもて海りゝはゝ老乃あゝりゝとゝ
らひもとあんゝあゝさ物をゝゝ世ゝうゝて金を
ゝ世ゝ〳〵ゝとゝいゝへゝとうけもゝこゝふゝきを
ゝ此小船のゝさゝもゝりまゝてこゝくまゝのゝりゝと云
事ゝを学てあゆこゝとゝゝ此ゝるゝをゝもゝてゝゝ〳〵

世ゝうゝ〳〵ゝ世ゝ行ゝ〳〵ゝ馬ゝのゝりてゝ此ゝゝゝゝ此
七日ゝまゝうゝて来ゝるゝゝ文ゝを乃ゝ所ゝゝゝ大福ゝゝゝこゝのゝ
ゝゝ衣ゝからゝゝゝて人ゝゝを出ゝゝてゝもゝゝゝてゝ世ゝ今ゝの世
ゝゝゝ昔ゝの世ゝゝを此ゝゝゝゝ

いろは事とゝんて何のあはをいまゝ〇おかゝ
あゝまきうれしくくしてあ　をるあはうれしてもゝ
あゝのゝうにひゝひゝひゝく姫ゝおゝゝ結ふ結ふゝ
きあ入ゝ結ふゝこゝ結みまはくさくゝ乃ゝ結ふゝ
きゝるゝといろえて結くまりゝゝきぬゝとゝんまは
こんゝやゝうの交ゝりなのゝをゝはこゝ〇の光
ゝはゝやゝきゝりたゝゝとゝんてゝう結ふゝき事
年ゝきゝ物ゝゝ大ゝよゝけぬ事ゝもけゝら
なゝゝ事ゝ結ゝゝゝうゝかくゝやゝひ光このゝゝから結
ゝよゝこゝてゝゝけまゝこのゝ海ひゝくゝあゝかゝゝこゝて
ゝこゝよ入結ひてゝまゝのゝえゝに結けて結光乃

けゝゝゝゝゝゝくゝして解ゝてゝとまゝりゝんゝもの
うゝとゝあはゝゝてゝうゝこゝうんくゝゝくゝゝゝらゝていゝう
ゝゝりゝうのゝうゝ

かゝゝりなゝ紀里ひよゝ解けぬゝうゝゝをゝゝゝを
たゝゝゝとゝうゝゝゝゝゝゝ

ひとりないてくるひさせおひさせようと
そくそくひきへもそまつまりかくるひきへてひ
度はかるるひわうんと女のんよも思ひとり此
あるさるはかくやひめれ面もあなるとうけかけ
きこそうれ人よあらせうんと思ひそうれとせらる
いるいつるするきこそえ志ひぬハ程史かくやひめ
おそれるえひつとそ衣そ史よやうんよ面を仕きを
こそきまこしとるるめと思ひて人のいつ弟ままも
けめ世にるさ抱なれそうきをまらとくうるかか
ひれく思うんとの給しれ光をやきて心ろんと
云たそれそれさもいそきまてうりとそて大臣よかく

なんドとりつ大臣こうへて云ふうんさそを給
こうまをなりけるをからうしてをとめろ
れるるる迎なれかうひあるんさはやとを
そやあきそ乃のへといるを史の弟こよ寄くん
て面うせ給つよめうくくと面けぬされいこそ
こと抱のうもありそりとりつ大臣光をんのひ
てうあきれもの名ますて面のへまかくやひめ
あれうきてをとすろこひてねるうれうえ寄入
けかあ乃ぬてをこよ入くぬを
乃ぬなくもゆとをりせはくハをろを
思ひのはうよを給くえまを

とあり。けふ。ちまたは。海わい。海ーよろう世乃人こ
あへ乃大臣大納すこ乃うら夜とまていまして
かく。面ひめよ。住給よとかきあつまやいま次なと
とふあ。ふ人の云かてい大よくくくやさるる
はめ。くくと。ふけわ。ーうしかくやひめあひ給
ハとといひけまこん是を。て。そとけるさものと
こあへなーと云けふ大伴のこ。まきき乃大納言い
我家よありと。ふ。ふ人をあ。めての。海ちくく
ぢのくひよよ。ちのひうあるおあるうまを
ゑてなりこん人ふはねうこんふとうれ。ん
とのこまをのこ。ぢ。ふの事をきてやさく

とあの事をいとこたこ。ふとー。ぢあのおこうやを
くぢこ。こーをいこんやこ。ふのくひ乃おいいこ
こんとやあこ乃大納云のあふ天のぢこひわ
いこんものこ命とすてこもをのこ。ふ。ぢ。ぢ
事をこうあこんとこて思へけまこ。ぢ國よなこ事
てんちるこ。ちこーの。ぢ。ふもあこすふ。ふの海ふ
すこ。ちこ。ちの。ふ。ふ。ぢ。ふ。ぢ。ふ思ひてこ。ふ汝
おかこ。ぢ。ぢ。ふこ。ぢこ。ぢのこ。ぢこ。ぢ。ぢこん
いこ。こハせんかこ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢこ。ぢ。ぢ。ぢこ。ぢ。ぢ
とあよまかこんとこよ大納云ん。こ。ぢひてあん
ちこ。こ君の役とんをこ。こつ君乃伯事をい

いかにかをうむく色さとの法よりかくひのむ
とりよとそおしふてはよしこの乃はかてく
ひものよ廣乃国のけぬまさせよるとあ。源氏
あ〇くにてつまにしば人こともゆうまていもねと
して我はをうんはむとりえてハ部よゆうくゑ
との給ふせうりをのく作ニ乃てあらぬ詩の首
乃くまを改すハゆりくれとの給へえいつちを
くあ〇乃むさたうんかえいをんをかく新を
きゆをとをゆふ事とそをりあ重給をせうな
拙をのくまけつく元或きをのうゑあゆ重
居或いをのうゆうさりうき雨へいぬ新君と

ゆ世かくつきる記乃ゆをあ世給ふ事とこあ
とこゆうぬ拙ゆ人大綱をとそ一まあひうりかくや
ひ発をを乃ん与はきいやうよのをんよくとのさ
まひてう海りうきあをにうり給ひてうゆを
ぬりまを記絵してゆう給ひて乃れよはいと
をうめくをく物うせをくうちくう乃をうひよ
をりゆ乃くもあうぬあやをり拙よをを記て
海ことをうるまをとれめをもをかくやひめを
かなうにゆのをんまうをてひをりぬーくし
給ひにうりく人ハよ海ひゆまをたまゆり
年こゆるまてをとをせをゆりとおうりていを

このひてきくことのかぎりニ人めつきとしてやつまき
まひろく非波の亀よおりまてとひ給よ
事へ大使の大納言殿人や舟てのりてゝ列
こゝろしてそゝくひのかまと祝るとや当ことは
をるに舟人あるくいたくあやしきすると
まゝひくさろたきす商船をなしとおもふ海よ
をちなき事をるを舟人もわれかえをて
かくいふとおもひてわゝ力をゝ列わゝいよ
といこゝろしてくひのあゝとりてんをそくを
ふやりたゝをまゝしとの給ひて舟よ書て海
こたありき給ふ人をくきに成くの方の

海よおれ出給ぬいかゝしくんをやき風吹世界
くゝかわて舟をゝ記をてありくいつまの方
まゝに舟我海中にまりハめくゝきまつ
て波を新ようちゝけつゝまきへ神ハ義かゝ程
ゝよ列ゝめきかく新よ大納言をまをひてまこう
かるまひきめ見をいゝんをいゝあんをとをゝとの給
ふからみをゝをゝてゝまゝ舟よ書て死ありくよ
まをかゝ海わ列ゝまをめをんをこゝ舟ゝこのそこよ
いゝまは神おちかゝわめゝまゝひをひり
神のゝすけわゝんを海よまゝれおゝをめて
ゝそをゝものみりとに成ゝまゝわてすゝ海

ある志ら波をへうめる所と掾元の御くし大網こ
ゑとやすての給ひくしかるに寄てハかちとりたん
ゆ事ゝとそこるきゝ所とゝのめなすくゝるのり
けるくゝゆそとあくとゝ波つきてのゆ給ひうちゑ
ゆくゝへてゆ神なくゝひゑ何わさをうけたうまり
給ん風ゆきゝ波をけしけ給ゆ神さへ以くゝ給ゆ
おちかゝ海やうゝるゝ誘をこゝろさんともとめ給
ゝへしあるゆゑゝやてもまうゝゆゝうするゝゝや神
よ神事給へと云給事なりとてかちゑのゆ神
きこうめゆ事給くゝゆゝとさるくゝゝをこゝろさん
と思ひゝり今よりのちゝ毛一まらゝるゝふうこ

かゝ事ゝとゝとゝ波をゝらくゝ立ゐるくゝ
ゝゝひ給ゆ事ゝゆ給ゆけるやあゝんや
うくゝ神なりやゝこゆひゝりて風を行ゝやくゝ
掾元のゆゝくゝ毛ハ誘のゆゝまゝゝこゝをけ給ゆ
ゆくゝ風ハゝゆ給ゆ風ゆあゝ給方の風ゆハあゝ
ゝを給ゝゝ給ゝゝ給ゝゝくゝりといへゝ大網言ハ毛を
ゆ入給ゝ波三四日ゝきて姉ゆゝゝゝ給ゝゝり
ゝゝまをゝれゝゝはりまゝあゝゝのゝまゝりけゝ
大網ゝ事ゆのゝ海ゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給んとおりひくいゝ給給ゝゝ給ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝ國ゝつけゝれゝ國の給ゝゝゝゝゝ

とうてゝ姉よりも姉おきあり給て私うこよ
ゆゝ行へ是れ有るよ法ひゝろさくあろうまう
こと所よそ雷雨よあらしさりうりと思ひてからう
しておさなのり行へ所をゝんまこハ風いとありさ
へまくくゝいとあられるさ雨の日よハ
すゝと二ほけうる信也是とんなりてそ國の
はゝ所をあゝあこさ雨ゆよ信給てさこつく
雨せのひてよやうくまれさゝあよへのひ
めうをいてうきてうんほうこをのこた
まりてゆ様ゝ川の前乃ゆをえうこさわ一ゝう
こ雨餐つと切まゝさわゝ和ゆ為かうりるを

もり給へまこはゆんかし辛ゝあり上ことてとまつる
とゆ大綱こ和ゆ居ての海りゝなんちゝよ
くもてこと城ぬ給ハ甘の所いよしもあ
ゆ雨きうれう雨をこんとてうこら井人この
ういせゝ雨んとゝうり海ゝくゝろとゝへさ
らもうこのこと雨ハ我さういきれまま
しゝくゝこへ城ようりかくやひあてふあか
盗人乃所川ゝ人をゝろさんとほうゝりうれ
のあさりゝよ今ゝとと現ゝ男たもあり
きそゝて家よおのゝうりゝけゆ拘たいゝ川の
雨をこゝぬ者先よ中ひつ毛を学てもれ給

ひしゝとの上ハかゝるこゝろひあい
とをあらせぬくうもゝ屋ハいとひかゝるものすなこ
るくらひていよ〳〵世界の人乃云けるハ文健
の大納言ハそうのくひ乃むをており〳〵まれ
いれ所ともあらしに所まこゝよりもゝけやうか
ゑ和歌をうへくいまし所なるとゝいとくまいあな
しへうさとのひゝ所ともゝ世よあらぬ事ゝは
なれそへうへうさとゝいひとゝめけ歌

けゝり物語上終